

アイン・ランドの資本主義観を理解するために 『肩をすくめるアトラス』と『海賊とよばれた男』を比較する

藤 森 かよこ

要旨

アメリカの国民作家・思想家のアイン・ランド (Ayn Rand) の思想は毀誉褒貶が激しく、特にその徹底した合理主義 (rationalism) は、日本人読者にとって敬遠されやすい。ところが、実は、アイン・ランドの思想の核となる彼女の資本主義観は、日本人にとって意外に理解しやすく共感を得やすい。それは、百田尚樹の『海賊とよばれた男』という経済歴史小説と、ランドの代表作の『肩をすくめるアトラス』を比較するとわかることである。これら二作品は、どちらも「資本主義の精神」を祝福し、どちらもリバータリアニズムの立場にある。マックス・ヴェーバーが論じたように、資本主義の精神を構成するのは、「労働が宗教的救済となること」と「目的合理的な経営」と「利潤の正当化」である。山本七平が発見したように、その資本主義の精神は江戸期の日本にも生まれていた。だからその明治以降の日本の近代化が可能であった。ランドの資本主義観は、一見奇異に見えて、ヴェーバーが論じた資本主義の精神の世俗化した形である。この文脈で、ランドの説く道徳としての資本主義は、日本人にとって理解しやすいものである。ただし、ランドが「いまだ実現していない理想」として説く資本主義の精神においては、日本的資本主義に見られるように、企業という機能集団は、共同体と未分化ではない。日本人がランドの資本主義から学べることは、個人を共同体に溶解させることによって機能集団を機能不全にすることを抑止する個人主義である。個人の尊厳である。

キーワード：資本主義の精神、リバータリアニズム、共同体、機能集団、個人主義

1 はじめに

本論の目的は、アメリカのユダヤ系ロシア系女性作家および思想家のアイン・ランド (Ayn Rand: 1905-1982) の代表作『肩をすくめるアトラス』 (*Atlas Shrugged*, 1957) と百田尚樹の『海賊とよばれた男』を比較対照することにより、アイン・ランドの資本主義観が日本人には理解しやすいものであることを指摘することにある。

筆者のアイン・ランド研究の最終目標は、政治思想史におけるアイン・ランド思想の布置を明示し、日本人にとってのアイン・ランドの意義を提示することにある。筆者は、アイン・ランドの思想を知ること、日本人にとって意義があると信じるが、率直に言って、アイン・ランドの思想をSFファンタジーの形式で表現した『肩をすくめるアトラス』は、日本

人読者から受容されているとは言えない。

筆者は、本論において、アイン・ランドの思想をより理解するために、百田尚樹の『海賊とよばれた男』という小説を補助線として使いたい。意外なようであるが、2013年の『本屋大賞』を受賞した『海賊とよばれた男』と『肩をすくめるアトラス』は良く似ている。どちらも一種の政治経済小説であり、資本主義の精神と企業と企業人のあり方を題材としている。描かれている資本主義の精神は、『肩をすくめるアトラス』においては、マックス・ヴェーバーが1905年に発表した『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で論じたカルヴィニズムの予定論から発した近代資本主義の精神の世俗化したものである。『海賊とよばれた男』に描かれている資本主義の精神は、山本七平が『日本資本主義の精神』で指摘したものである。山本七平は、江戸時代において、労

働や勤勉さを宗教的救済にする哲学と、商業を肯定し、利潤の獲得を肯定する思想が日本に生まれていて、その背景があったからこそ明治以降の日本の近代化が曲がりなりに成功したことを指摘した。

筆者は『海賊とよばれた男』と『肩をすくめるアトラス』を比較することによって、自分の中の伝統的な日本資本主義の精神を自覚することができた。日本人が自分の中に自然化されている日本的なるものを意識し節制することは意義あることに違いない。同時に、筆者は、この両作品を比較することによって、アイン・ランドの思想をより理解できた気がした。特に、アイン・ランドの資本主義観の道徳性をあらためて認識した。

その意味で、本論は、拙論「アイン・ランドの思想と『肩をすくめるアトラス』」(藤森, 2013, 113-28)を補足するものである。同時に、本論は、拙論「アイン・ランドの資本主義観---反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福した*Atlas Shrugged*」(藤森, 2008)の補足であり、同じく拙論「アイン・ランドと新自由主義」(藤森, 2016)の続編でもある。したがって、本論の記述には、これらの論文と重なる部分が少なくない。加えて、本論は、2013年9月15日に開催された「東京アイン・ランド読者会」における講演「アイン・ランド『肩をすくめるアトラス』と百田尚樹『海賊とよばれた男』---日本人にとってのアイン・ランドの意義」の内容を発展的に補足したものである(藤森, 2014 DVD収録)。

本論は以下の構成を採っている。2に『肩をすくめるアトラス』の内容を確認する。3においては、『海賊とよばれた男』の内容を確認する。これら2作品の内容紹介は長すぎると読者は感じるかもしれない。しかし、4以降に展開される議論を正確に把握するためには、これらの物語内容をきちんと知っておかねばならない。あえて、長い物語紹介を試みた。

4においては、両作品の主たる共通点であるところの、「資本主義の精神」祝福物語の様相と、底流するリバータリアニズムについて指摘する。5においては、結論にかえて、ランドの資本主義観から日本人が学べることを明示する。

2 『肩をすくめるアトラス』物語内容確認

この小説の表題のアトラスとは、言うまでもなく、ギリシア神話の天球を支える巨人アトラスである。アイン・ランドの生まれ故郷であるロシアのサンクト・ペテルブルクには、いたるところに「アトラス」の彫像を見ることができる。5、6階建ての中層建造物の外壁の装飾として、屋根を支えるアトラス像が使用される様式が、この古都が建造された頃の建築の流行であったようだ。なかには女性のアトラス像もある。ランドにとっては、建物を支えるアトラス、ひいては世界を支えるアトラスの形象は、幼いころより親しいものであったに違いない。

この小説は、要するに、この世界の政治や経済や文化を支えている頭脳と才能と責任感を持った人間が、彼らや彼女らの能力に依存し、それを搾取する人々に自分たちを搾取させながままにしないで、「ストライキ」を始めたなら、この世界はどうなるか、つまりこの世界を支えるアトラスのような人々が「もうやめた」とばかりに「肩をすくめる」ならば、この世界はどうなるか?ということを描いている。

『肩をすくめるアトラス』は、ペーパーバック版でも1063ページある長編小説であり、プロットも複雑で登場人物も非常に多い。ヒーローと目される登場人物でさえ4人もいる。この小説が、「ジョン・ゴルトって誰?」(“Who is John Galt?”)という文で始められているように、この小説を推進する主要プロットは、ヒロインのダグニー・タグガート(Dagny Taggart)が、このジョン・ゴルトが誰なのか、何を目論んでいるのか、を追求する謎解きである。時代は具体的に設定されていない。便宜上、ヒロインを中心にプロットを以下のように要約してみる。

ダグニー・タグガートは、無一文から祖父が設立し発展させたアメリカ屈指の大鉄道会社「タグガート大陸横断鉄道」(Taggart Transcontinental Railroad)(以後T T Rと記す)の鉄道運行部門担当副社長である。34歳の若さながら、無能な社長の39歳の兄ジム(James Taggart)を歯牙にもかけず、大鉄道会社を運営する。少女時代から、彼女とこの鉄道

会社は一体だった。この鉄道会社は、彼女にとっては、人間の可能性と有能さと責任の象徴だった。毎夏をすぞすハドソン河渓谷沿いの別荘近くにある T T R の駅において、創業者の孫娘という立場を秘して、夜勤電話番をアルバイトで勤めるほど、彼女は鉄道の全てを熟知しがった。大学でも工学を学んだ。

最近、彼女は、銀行家や音楽家や法律家から鉄道技師まで、どの分野においても、優秀な責任感ある人材に限って、なぜか仕事を辞めて失踪することが多くなっていることに気がついている。そのために、物資の納期が守られなくなっている。工事が進展しなくなっている。鉄道の安全な管理など、文明社会を円滑に動かすもろもろのシステムが正常に機能しなくなっている。

それに加えて、ダグニーが危惧しているのが、政府の政策だった。ダグニーは、人間の創意工夫と努力を促す自由競争による社会の発展を信じているのだが、政府は、自由競争による資本主義経済体制から、発明家や産業家や労働者が努力と頭脳で獲得した利益を国家が徴収し、管理し、それらを「必要に応じて」国民に分配し、国民みなが繁栄できる「協同的共生社会」を実現する経済体制へ移行しようとしていた。

しかし、それは、大義名分ではしかなかった。新しい起業家たちや、進取の気性に富む企業家たちとの自由競争を脅威と感じる凡庸な類の資本家たちは、政府を動かして、自分たちの地位が安泰であるようなシステムを作り、競争相手を排除しようと考えていた。彼らが政府に採らせた政策は、次のようなものである。

まずは、適者生存の弱肉強食の企業間競争を排すという口実で、新製品を発明して売り出すことや、新事業を開拓することを制限する「反共食い法」

(Anti-dog-eat-dog Rule) を施行させた。優れた製品やサービスを提供できる企業は、市場を独占することになるから、結果的に公共の福祉に反することになるから制しなければならないという口実のもとに、すべての会社にとって規模に応じて必要な利益が得られるようにする「機会均等法」(Equalization of Opportunity Bill) を実施させた。社会の安定した全体的協同的發展を促進するという理由のもとに、

労働者や従業員の流動化を避けるため、離職や転職や解雇を禁じる「10-289号指令」(Directive 10-289)も発令させた。

ダグニーの兄ジェームズは、自分の無能さを思い知らせる有能な産業家、企業家たちへのルサンチマンから、これら資本家集団と政府の陰謀に加担する。彼は自分が享乐的に怠惰に生きて、社長の地位と富が保証されればいいと考えるだけの卑劣な人間である。しかし、口では「最大多数の人々の幸福の実現が正義」だと唱える。

これらの政策のために、アメリカの産業は次第に衰退していく。労働者は労働意欲をなくしていったと同時に、前からの現象であった「人材の失踪」に拍車がかかり、T T R を含めたどの産業にも、どの商業分野にも、無責任と責任転嫁と無能と投げやりな人々のみが残される。

社会の停滞と不安と増していく混乱の中で、人々の間には、答えようもない問題には“Who is John Galt?”と言う奇妙な習慣が、すでにできあがっていた。ダグニーは、そのジョン・ゴルトこそ、社会から有能な人材をどこかへ流出させる「破壊者」だと考える。ダグニーは、その破壊者から自分の鉄道会社を守らなければならないと思う。最後までその破壊者と闘うことを決意する。

休暇の旅行中にダグニーは、廃業された大自動車工場の廃屋に打ち捨てられたモーターの残骸を見て驚愕する。工学を専攻したダグニーには、その残骸が現行の輸送機関の問題をすべて解決できるような前代未聞の画期的モーターの完成品が故意に破壊されたものとわかる。その未来を開くモーターの設計者をつきとめるために、ダグニーは調査を重ねるが、その設計者はわからない。

実は、そのモーターの設計者こそ、ジョン・ゴルトだった。彼が勤めていた大自動車会社が売却されたとき、新しい経営者は「能力に応じて労働し、必要に応じて収入を得る」システムを導入することにより、理想的な共同社会としての新しい企業を作りたいと発表した。その時に、このような会社は破たん必至だと予測し、ゴルトは会社を辞めた。自分が設計して完成させたモーターを破壊して失踪した。

この会社においては、収入は労働量や功績ではなく、家族数などの必要に応じて分配され、それも労働者の投票で決定されるという全体主義的システムのために、能力のある者は労働過剰になるばかりだった。有能な者の辞職が相次ぎ、かつ残った労働者には故意の怠慢が広がった。無能な者は収入が保証されているので一層に怠惰になり、労働者の志気は壊滅した。また、同僚の結婚や出産は、自分の収入の減少につながるから、労働者間の嫉妬反目は増大した。労働環境は息の詰まるような相互監視体制となり、生産性を激減させた。この自動車会社は、ゴールトが予測したように倒産した。

実は、この現象を予測して、早々と会社を捨てるだけの見識と勇気を持った男についての噂が、“Who is John Galt?”という流行りことばの起源になったのだった。つまり、「ジョン・ゴールトって誰？」→「知らない」→「答へのわからないことを言うなよ、わかるはずない」と変化したのである。

ジョン・ゴールトは、有能な人間の能力を搾取し、有能な人間の美德を利用して自分は楽をして生きようとする寄生虫の人々に汚染されていく社会に見切りをつけて、新しい社会を創設しようと、賛同者を募ってコロラド山中に別社会を建設する。失踪した人材たちは、この場所を「ゴールト峡谷」(Galt's Gulch)と呼ぶ。この別天地、新世界が必要とする電力すべてが、ジョン・ゴールトが発明した永久運動モーターによって生み出されている。

ゴールトたちは、この新世界にふさわしい人物を探し救出するために、「旧世界」では人目につかない労働に従事しながら、秘密裏に活動していた。ゴールトは、10年以上もダグニーの鉄道会社の下級労働者をしながら、いずれダグニーをも「新世界」に誘うつもりで彼女の行動を監視していた。真相を知って驚くダグニーだが、祖父から伝わる鉄道会社を見捨てるわけにはいかない。

社会はさらに停滞し、混乱する。物資の輸送や交通が麻痺する。農産物や工業製品も生産量が減少し、かつ生産地から消費地の都会までの物流も機能しなくなった。電力などエネルギー資源の生産管理や利用システムも壊滅しつつあった。

ゴールトは全米へのラジオ放送を通じて、新世界樹立の必要性と旧世界の搾取的構造の破棄を唱えた。彼と彼の仲間の大義を国民に伝えた。政府はあわてるが、混乱した社会に秩序をもたらす人材が政府機関にはいないので、ゴールトと妥協を図ろうとする。しかし、ゴールトは、その取引に応じない。政府機関は彼を逮捕し、拷問にかける。ダグニーや「新世界」の仲間たちは、ゴールトを救出する。ダグニーも、ついに旧世界に絶望し、彼らと行動をともにすることになる。

システム機能不全のために、混乱は一層拡大した。しかし、その收拾をつける責任ある機関も人材も旧世界にはいない。みな、「ゴールト峡谷」に行ってしまった。繁栄を極めたニューヨークにすら大停電が起き、アメリカ合衆国は破滅の道をたどる。しかし、ゴールトたちにとって、このアメリカの破滅こそが、「彼らのアメリカ」建国の真の始まりだった。破滅した旧世界を再建すべく、ゴールトやダグニーや他の仲間たちは、「ゴールト峡谷」からニューヨークをめざす。

以上が、『肩をすくめるアトラス』の物語内容である。

3 『海賊とよばれた男』物語内容確認

この小説は、石油精製・販売や石油系産業全般に幅広く従事している実在の企業「出光興産」の創始者である出光佐三（いでみつ・さぞう：1885-1981）をモデルに書かれている。出光佐三の破天荒な企業経営者としての、愛国者としてのスケールの大きさについては、多くの伝記が書かれてきた。百田尚樹は、『海賊とよばれた男』において、出光の伝記物語を事実にできるだけ忠実に小説化している。小説自体は、太平洋戦争敗戦の昭和20年1945年8月15日から始まり、敗戦直後の苦闘が描かれ、そこから主人公の生い立ち、青春時代が描かれ、また現代に戻るといった構成がされている。ここでは、便宜上、年代記的に、物語内容を紹介する。

主人公の国岡鐵造（くにおか・てつぞう）は、明治

18年(1885)に福岡県宗像郡赤間村で生まれた。先祖は宇佐八幡宮の大宮司であり、父の代では藍玉を仕入れて染物問屋を営み生家は裕福だった。当時の慣習で次男の鐵造は高等小学校卒業後は商家の丁稚となる予定であったが、進学を望み福岡商業学校を出て、神戸高等商業学校に進学した。そこで、校長や優れた教師の影響を受けて、鐵造は商人としてのあるべき生き方を心に刻む。それは、「生産者と消費者を結ぶ、中間搾取のない商いをすること」であり「黄金の奴隷にならない商人でいる」ことであった。卒論は、石油の将来性と統制経済の弊害について書いた。彼の卒論は、官僚による石油統制をめぐる戦いに明け暮れた彼の生涯を予言していた。

卒業後は神戸の従業員3人の酒井商店に就職した。当時飛ぶ鳥を落とす勢いだった鈴木商店からも採用されたが、早朝から夜遅くまで働く店主の酒井の勤勉さに感銘を受けて入社した。鐵造は、丁稚の立場から急速に頭角を現し、台湾での事業拡大も成功させた。

鐵造が3年ぶりに故郷に帰ると、実家の染物業は化学染料のために傾き、一家は離散していた。鐵造は、独立して自分の店を持ちたいが、そのような資金はない。そのとき淡路島出身の金持ちの日田重太郎が、京都の別荘を売却した金を無償で提供してくれた。神戸高商時代に日田の長男の家庭教師をした鐵造の人柄と才能を日田は認め、それ以降も何度も鐵造の窮地を救ってくれた。

鐵造は、故郷に近い門司に「国岡商店」を立ち上げ、25歳の店主となった。離散していた家族を呼び戻し、念願の石油商をめざす。自分で何度も実験し調合した機械油を苦心して紡績工場に売った。また、当時からやっと一般的になったエンジンを搭載した漁船に燃費が良く安価な軽油を、手漕ぎの伝馬船で漁船に接近して売ることに成功した。揺れる海上で正確に軽油を計量できる装置も造った。門司の業者は下関では売ってはいけないという業界の決まりを、「海の上で売るので問題はない」と主張した。国岡商店の船は関門海峡で油を売りまくる、「海賊」とよばれた。

鐵造は大正3年1914年に国岡商店を移転した。店

員が20人近くになり、前の店舗では狭くなったからだ。彼は店員たちとともに生活し、礼儀作法や手紙や伝票の書き方を教えた。彼にとっては、店員は従業員ではなく、彼らの親からの大事な預かり者であり、かつ「家族」であった。鐵造のこの姿勢は生涯続いた。彼の会社は、解雇なし、定年なし、出勤簿なしだった。加えて、非上場で労働組合なしだった。会社は大きな家族であり共同体であるのだから、家族を解雇しないし、家族に定年はない。家族は資本家と労働者ではないので、労働組合など無用。上場して株式会社になれば、会社は家族ではなくなり、株主のものになるので上場しない。

鐵造は同時に、部下には極力権限を持たせた。主体的に判断し働くことを求めた。その店主の姿勢に応じて、彼の部下たちは異常なほどに働く競争相手の会社から恐れられた。

国岡商店への同業他社からの風当たりは厳しくなっていく。鐵造は、販路を海外に広げることにする。第1次世界大戦後に、日本は満州に進出した。鐵造は満鉄に自分が調合した寒さに強い機械油を売り込む。ロックフェラーのスタンダード石油との競争に勝ち、鐵造は満鉄に食い込んだ。国岡商店は、満州のどんなどころにも販売網を広げて神出鬼没の働きをした。上海にも進出した。

そのうち関東軍は戦線を中国に拡大し、アメリカが日本への石油輸出を禁止した。日本軍はボルネオやインドネシアの石油を目当てに東南アジア諸国を占領し、民間企業の国岡商店も軍の要請で店員を遠い南方に派遣する。鐵造は、愛国者であり、軍の要請には応えた。店員たちも店主の意を汲み、軍も感心するくらいの有能さを示す。国岡商店の海外の営業所は62店に達した。店員の大半が、朝鮮、満州、中国、フィリピン、ベトナム、インドネシアで働いた。

昭和16年1941年12月8日に日本は米英に宣戦布告した。石油の統制が始まった。多くの社員が徴兵された。鐵造は、彼らの家族に給与を送り続けた。

そして昭和20年1945年8月15日敗戦。国岡商店は海外の資産を全て失ない、海外に派遣されていた多くの部下たちが死んだ。鐵造は60歳だった。敗戦直後の国岡商店は、海外の営業所や戦地から帰って

くる社員を入れて1000名以上の社員を抱えていたが、店主の鐵造は誰も滅首しなかった。ラジオ修理や開墾など、社員が食べていけることならば、どんな仕事も引き受けた。軍のタンクの底に残っている泥の中の石油を汲みだす仕事も引き受けた。ホワイトカラーの店員たちが裸になってタンク底に下りて、充填するガスに耐えながら、バケツでタンク底の泥を汲み上げ、泥の中から石油を抽出し販売した。日本占領軍GHQは、旧日本軍のタンクの底に溜まっている石油を全部使用し終わらないと石油を割り当てないと言い張ったからである。他の石油業者が引き受けなかった仕事を鐵造が引き受けたのは、企業家である前に、彼は国を憂える愛国者であったからだ。

鐵造は、公職追放を言い渡されたが、GHQに乗り込み、かえってGHQから信頼される。しかし、官僚的な石油配給公団や、同業他社13社は、国岡商店を追い詰めていく。同業他社は、みな外国の石油会社に株式を譲渡し、純粋な独立した「民族系石油会社」は国岡商店だけであった。新聞に13人の敵から斬りつけられようとするサムライ鐵造の風刺漫画が掲載されるくらいに、国岡商店は孤立無援だった。政府にもいらまれていた。それは、国岡商店が省庁の天下り官僚を受け容れなかったからである。

鐵造は、日本が主権を取り戻し独立国家になったら、石油を存分に輸入できるはずだと考え、自力で外国に行き石油を仕入れることができるように14基のタンクを入札購入した。タンク購入費は、国岡商店の経営方法を信頼した東京銀行が融資してくれた。鐵造は、新たにタンカーを建造したいと思うが、運輸省の許可が出ない。

昭和25年1950年に朝鮮戦争勃発。日本経済は特需で蘇った。石油業界も潤った。鐵造はタンカー建造のために粘り強く政界にも働きかけ、日本最大のタンカー建造の許可を得た。昭和26年1951年に「日章丸」完成。さらに、国岡商店は、バンク・オブ・アメリカから400万ドルという巨額の融資を得て、「セブン・シスターズ」と呼ばれる石油業界のメジャーの目を逃れ、アメリカの独立系会社から石油を購入し、日章丸が運んだ。その石油は「アポロ」と命名され、国岡商店はそれを低価格で販売し、消費者に喜ばれ

た。国岡商店にとって初めての海外からの直接石油購入と自前のタンカーでの運搬だった。

この出来事によって、日本の消費者は石油の価格が外国の石油会社の好きにされていた事実を知ることになった。以後、「セブン・シスターズ」は日本で暴利を貪ることができなくなった。

昭和27年1952年に鐵造のもとに、イランの石油を買わないかという申し出が来た。当時イランは、やっと英国から独立を果たし、国内の油田を国有化した。英国を恐れてイランの石油を買う国も業者もなかった。イランから石油を買ったイタリアのタンカーは英国海軍に拿捕された。「セブン・シスターズ」を中心とする国際石油カルテルも、安価なイランの石油を購入させまいと、「イランの石油を輸送するタンカーを提供した船会社とは、今後、傭船契約を結ばない」という通告を出した。鐵造は、イランから石油を購入することを決断した。

英国や他の石油業者や日本政府や社内の人間にも秘密にして、日章丸はイランへ向かった。なんとかイランに到着し、帰路は英国海軍の待ち伏せから逃れつつ、日章丸はイランの石油を日本に運んだ。世界中が驚愕した快挙だった。このことが契機となって、イランと日本の間に絆ができた。外務省はそれを自分の手柄のように言うが、事實は、国岡商店の勇気ある行動のおかげであった。

しかし、アメリカのCIAによる策謀で、イランにクーデターが起きて、イランは王政に戻ってしまった。イランの国有石油会社は、英米の石油会社の連合体の傘下に入り、自由な決断ができなくなり、国岡商店との契約は消えた。

次に鐵造が考えたのは、自前の製油所の建設であった。再び、バンク・オブ・アメリカからの巨額の融資を得て、徳山に最高の製油所を建設することができた。それも、たった10ヶ月で。製油所建設を請け負ったアメリカの石油精製技術開発専門会社UOPから派遣された技師たちは、国岡商店の店員たちの優秀さと、店主の鐵造の経営者としての偉大さに感銘を受けた。昭和32年1957年3月に最新式の製油所が完成した。徳山の景観に配慮し、地元の産業にも配慮した美しい製油所だった。半年後には、完成した

徳山製油所にタンカーが運んできた石油を送る海底パイプも完成した。

昭和35年1960年に、国岡商店はソ連の原油を購入する契約をした。反対する重役たちに鐵造は言った。「ソ連とのビジネスは東西両陣営の平和的共存に役立つ」と。この件については、会社に右翼の抗議があった。アメリカからの非難もあった。鐵造は国賊呼ばわりされた。

昭和37年1962年に政府が「石油業法」を成立させた。自由貿易に歯止めをかけて、石油業界を統制しようとした。鐵造は、この法律は「消費者不在」と「官僚統制」に繋がるとして反対表明をした。しかし、他の石油会社は賛成した。国岡商店のような突出した会社を抑えつけるには都合の良い法律であったから。事実、この法律は、国岡商店を抑えるために通産省が仕組んだことだった。背後には、アメリカのメジャー石油会社の意向があった。

同年の暮れに日本を異常気象が襲った。しかし、「石油業法」のために、石油が流通せず、消費者は寒さに震えた。鐵造は、通産省と石油連盟に対して、生産調整の撤回を要求した。通産省は、国岡商店に石油連盟の協定に従うよう通達してきたが、国岡商店は石油連盟を脱退した。世論は国岡商店を支持した。鐵造は、「政府の石油業界に対する干渉は強すぎる。消費者の立場を忘れている。輸入自由化に逆行する統制強化である」と訴えた。この悪法が撤廃されたのは、昭和41年1966年だった。やっと市場経済のもとで、石油を自由に販売できるようになった。石油の統制は終わった。

昭和48年1973年10月に、第4次中東戦争が起きた。石油輸出国機構（OPEC）加盟のペルシャ湾岸6カ国は原油価格を70%も上げた。さらに、アラブ石油輸出国機構（OAPEC）は、イスラエルが占領地から撤退するまで石油の輸出禁止を宣言した。先進国経済を支えた安い石油時代が終わった。鐵造は、この出来事を、享楽に慣れきって節約を忘れた日本人に下された天の試練と考えた。石油危機によって、本来の日本人の美德を取り戻せばいいのだと語った。彼の見解は、一石油会社の経営者の立場を高く超えたものであった。

その後も紆余曲折はあったが、実業界の一線を退いた国岡鐵造は、昭和56年1981年3月に95年に渡る英雄的生涯を閉じた。

以上が、『海賊とよばれた男』の物語内容である。

4 類似点

『肩をすくめるアトラス』と『海賊とよばれた男』の共通点は、どちらも知識人やアカデミズムからは無視される「大衆娯楽長編小説」であることが挙げられるが、そのこと自体はどうでもいい。誰も読まない「知識人推薦本」など意味はないから。大きな共通点は、どちらも「資本主義の精神」賛歌であり、どちらも底流にリバータリアニズムがあるということである。

4.1 資本主義の精神賛歌

ここで言う「資本主義の精神」というのは、マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で論じた「近世初期の西ヨーロッパにおいて資本主義経済が勃興してくる過程で、その動きを人々の心の内側から推し進めていった心理的機動力」(ヴェーバー、記者大塚久雄解説、373)である。周知のように、ヴェーバーは、「まず商業が発達し、そして、その商業やその担い手である商人たちを内面から動かしている営利精神、営利原理といったものが社会の至るところへしだいに浸透していくと、その結果として近代の資本主義が生まれた」(376)という通説を退けた。なぜならば、近代資本主義なるものは、このような「利潤追求」という意味での資本主義に反対する経済思想が支配する地域、つまりカルヴィニズムや、その分派のピューリタニズムが支配していたような地域から生まれたからである。小室直樹によると、近代資本主義が成立するには、労働や勤労を宗教的救済とする精神の確立と、目的合理的計画による経営の確立と、利潤の正当化という3要素が不可欠である(小室1992、124-25)。

簡単に言えば、カルヴィニズムの予定説、決定論(救済はあらかじめ神が決定しているのであって、

人間の外部にある)を信じた人間は、自分が救済されていることを自分に信じさせ、他人にも信じさせるためには、神の目になかった生き方を絶えず自分に課すが、それは具体的には自分の有能さを示し、その有能さによって社会に貢献する。つまり、ここに労働の「天職」観が生まれる。労働は救済を保証するのだ。つまり、資本主義の精神を構成する最も重要な要素は、「労働を神聖なる宗教的行動とする精神」(29)である。

次に資本主義の精神の重要な部分を構成するのは、目的合理性である。神の目になかった有能さを示すには、やみくもに労働するだけでは実現できない。目的に最適した努力が必要となる。これが目的合理的に行動するということであり、行動的禁欲を実践するということである。この行動的禁欲というのは、自分の欲望を抑えて積極的には何もしないと言う非行動的なものではない。目的のために、ある行動に集中し、他のことを欲望せずに忘れる。これが行動的禁欲である(96)。「企業は、明確に目的を設定し、その目的を実現するために、計画を建てる。これが近代資本主義の企業の特徴である。さまざまな資材、労働を合理的に組み合わせ、利潤を最大にすべく計画し、行動する」(32)のであり、「消費者もまた、効用を最大にすべく、行動する。かくのごとき企業と消費者をもって『経済人』と定義する」(33)と小室は述べている。古代からあった単なる金儲けの営みは資本主義ではない。

次に資本主義の精神の重要な考え方は、(結果としての)利潤の正当化である。貨幣の獲得の正当化である。金儲けの正当化である。労働を宗教的救済とした人々は、隣人が必要としているものを生産し、自分と隣人が合意して納得した価格で自分の生産物と貨幣を交換する。そのような正当な誰も搾取しない納得した上での価格における交換は、隣人のためになるのであって、神の目にかなう倫理的行為である。だから獲得した貨幣が結果として蓄積されることは問題ではない。逆説的に、貨幣が蓄積されないということは、利潤が獲得できないということは、金儲けができないということは、隣人の役に立つものを生産できないということであって、利潤が少な

い人は隣人愛が薄いのかもしれない(127-28)。つまり、「隣人愛の実践として、われわれは日常の仕事に献身しなければならない。言いかえるならば、金儲けのためでなく、仕事そのもののためにわれわれは仕事に励まなければならない。それは結果として利潤をもたらす」(大塚, 1977, 133-35)とカルヴィニズムを信じた人々は考えた。

これら3点の条件を備えていてこそ、「資本主義の精神」と言えるということは、学術的前提であり、言うまでもなく本論でも前提である。この観点から見て、『肩をすくめるアトラス』も『海賊とよばれた男』も「資本主義の精神を祝福する物語」である。以下にその相を確認する。

4.1.1 『肩をすくめるアトラス』における資本主義観

アイン・ランドの資本主義観を理解するには、彼女が「客観主義」(Objectivism)とよんだ彼女の思想全体を把握する必要がある。

「客観主義」は、形而上学的には客観的現実(Objective Reality)、認識論的には理性(Reason)、倫理的には自己利益(Self-interest)、政治的には自由放任資本主義(Laissez-faire Capitalism)の立場を採るというものである。以下は、『利己主義という気概』(*The Virtue of Selfishness*, 1961)に収録された「客観主義の倫理」("The Objectivist Ethics")というエッセイからアイン・ランドの哲学「客観主義」の内容を、筆者がまとめたものである(Rand, [1961], 1964, 13-39)。

(1)人間は生き物である。生き物である以上は、生き延びることが目標である。人間が生き延びることに益になるものは「善」であり、人間が生き延びるのに障害になるものは「悪」である。生き延びることに利益になることを求めなければならないという意味において、人間は利己的であらねばならない。一般的に言われる利己主義の意味は、「欲望のおもむくままに生きること」であるが、利己主義の本来の意味は「自己に利益があるようにすること」である。「欲望のおもむくままに行動すること」は自己利益に反するので、真の利己主義ではなく、単なる気まぐれである。

(2)人間が生き延びるということは、どういうことか。現実には人間の思惑とは関係なく存在する客観的実体である。人間は、現実を認知し把握することができるが、それを創造することも変えることもできない。たとえば、人間が水を望んでも水は出現しない。水のある場所まで移動しなければならない。人間は植物ではないから、移動せずとも日光や土の中の栄養素を吸収して生き延びることはできない。本能の中に生き延びるための行動が、人間にはプログラミングされていない。獣のように身体能力が高いわけでもない。人間の場合は、すべて学習しないと、生き延びることができない。脳の力、思考力だけが、人間の持つすべてだ。人間は、思考力によって、自分の欲望や願いでは変わらない現実に関わりかけ、自らにとって価値あるものを獲得し、生産することによって生き延びる。人間の英雄性は、このような生産性にある。

(3)思考とは何か。人間の諸感覚が捉えた事物をそれと確認し (identify)、他の事物と関連付け統合する (integrate) 過程が思考である。この思考を稼働させる機能が理性 (reason) である。理性だけが、人間が客観物である世界に対処して生き抜く知識を獲得する手段であり、行動への適切な指針である。頭脳と身体を適切に使って現実に対処し、自分が生き延びるために利益になるものを入手できれば、その思考と行動は合理的である。それに失敗するのは思考と行動が合理的でなかったということである。思考と行動において合理性がないと、しかも長期的視野に基づいた合理性がないと、人間は生き延びることができない。

(4)したがって、信仰や感情を知識獲得の手段とする神秘主義や、確実な知識は人間には獲得不可能なものという懐疑主義は否定される。また、人間存在が、運命とか育ちとか遺伝子とか経済状況の犠牲者であるとする決定論も否定される。人間の生は、客観的実体である現実に対処して、生き延びることに利益になることを選択し実践するという合理的な思考と行動の蓄積であって、それ以外のものではない。

(5)そういう存在としての人間が、そういう存在としての人間と関わるということは、互いの合理的な

思考と行動によって獲得した価値あるものを、合意の上で交換するという関係でなければならない。互恵の関係でなければならない。したがって、正しい人間関係は、すべて交易者、商人 (trader) の関係である。愛情関係や友情関係も、互いが生み出した価値の交換関係である。この意味において、「無償の愛」はありえない。「利他主義」はありえない。ありえない利他主義を推奨する人々は、他人が生み出した価値と交換されるにふさわしい価値を生産し提供することなしに、他人が生み出した価値を手にしたいたかり屋か搾取者が寄生虫である。

(6)右記のような人間の条件と人間関係のあり方を守るものが道徳であるが、この道徳の実践を擁護する経済体制は資本主義である。個人間の合意のうえでの交換関係、長期的視野に基づいた合理的な自己利益に基づく交換行為に干渉し規制する体制は邪悪である。したがって、自由放任資本主義が道徳的経済体制である。ただし、資本主義はいまだ完全には実現されたことがない「未来のシステム」である。なぜならば、道徳の実践の不足により、互恵の交換関係ではない利他的な搾取関係は、いろいろな形で残っているからである。世界史上初めて、資本主義社会として建国されたアメリカ合衆国も、混合経済や経済統制をまぬがれていないからである。

(7)政府のただひとつの適切で道徳的な目的は、個人の生き延びる権利と、それに伴う所有権を保護することである。物理的暴力から人間を保護することである。合理的な思考と行動によって獲得した価値あるものに対する個人の所有権が守られないということは、人間の生そのものが冒瀆されることである。それらの個人の諸権利の侵害は、具体的には物理的強制力 (暴力) の行使によるので、政府は、物理的強制力 (暴力) の行使を抑止する物理的強制力 (暴力) を持たなければならない。その力の行使は、恣意的であってはいけない。個人の諸権利を侵害する暴力に報復し反撃するときのみ、力の行使がゆるされる。

(8)物理的強制力からの脅威がなければ、生き延びるために合理的で長期的視野に基づいた自己利益のための活動に人々は専心できる。そのような人間で成立する自由な社会は発展し繁栄する。それ以外

のことに政府が介入し規制することは、国民の合理的な思考と行動の自由な実践を抑圧する。ひいては、それらの自由な実践によって形成される自由で豊かな社会の発展を阻害する。統治機関による規制は、その規制行為に従事する官僚組織の肥大を招き、税金公金浪費が増大する。そもそも、政府運営資金は、政府が提供するサービスに対する国民からの「自主的支払い」である（べきだ）。略奪者による物理的強制力を抑止する公的機関である裁判所と警察と軍の運営に対する「自主的支払い」である（べきだ）。国民の収入は政府や官僚の所有物ではない。「公」とは、政府や官僚組織の中のある個人の私物に転化する危険が常にある。政府や公的機関が、国民にとって最大の略奪者にならないように、最悪最強の暴力団にならないように、私人である個人の国民は常に警戒しなければならない。

以上が、「客観主義」の内容である。しかし、これだけでは彼女の資本主義観を理解しにくいかもしれない。彼女自身の言葉を見てみよう。

A pure system of capitalism has never yet existed, not even in America; various degrees of government control had been undercutting and distorting it from the start. Capitalism is not the system of the past; it is the system of the future ---if mankind is to have a future. (Rand, [1961], 1964, 37)

（純粋な資本主義制度というものは、いまだかつて存在したことがない。アメリカでさえ、そうである。政府による規制が様々な程度にあり、それは最初から資本主義というものを切り崩し、歪めてきた。資本主義は過去の制度ではない。未来の制度である。ただし、人類に未来というものがあればの話だが）

ランドのこの言葉は、かなりの衝撃力を持っている。資本主義はまだ実現されていない？それは、どうということだろうか。

Money is a tool of exchange, which can't exist unless there are goods produced and men able to produce them. Money is the material shape of the principle that men who wish to deal with one another must deal by trade and give value for value. Money is not the tool of the moochers, who claim your product by tears, or of the looters, who take it from you by force. Money is made possible only by the men who produce. Is this what you consider evil? (Rand, [1957], 1992, 382)

（カネとは交換の手段です。もし生産される物がなければ、人間が物を生産できなければ、交換というものは存在しません。他の人間と取り引きしたい人間が、交易によって取り引きするという行為、つまり価値ある物を得るために別の価値ある物を与えるという行為の原則の物質的形がカネです。カネはたかり屋の道具ではありません。たかり屋は哀れっぽく泣いてあなたの生産物を所有することを主張します。カネは略奪者の毒でもありません。略奪者や不正利得者は、あなたからあなたの生産物を暴力で奪います。カネは生産する人間によってのみ可能にされるものです。これを、あなたは悪とおっしゃいますか？）

上記の引用文は、『肩をすくめるアトラス』の登場人物のひとりが、他の登場人物が「カネは諸悪の根源だ」と言ったときに返す言葉である。さらに、この登場人物は次のように語る。

To the glory of mankind, there was, for the first and only time in history, a *country of money*-and I have no higher, more reverent tribute to pay to America, for this means : a country of reason, justice, freedom, production, achievement. For the first time, man' mind and money were set free, and there were no fortunes-by conquest, but only fortunes-by-work, and instead of swordsmen and slaves, there appeared the real maker of

wealth, the greatest worker, the highest type of human being—the self-made man the American industrialist. (Rand, [1957], 1992, 384)

(人類にとって幸いなことに、史上で唯一初めて、カネの国が出現しました。道理、正義、自由、生産、業績の国たるアメリカに、これより高い敬虔な賛辞を私は奉げられません。はじめて人間の精神とカネは解放され、征服によって得られる財産がなくなり、仕事によって得る財産だけになりました。こうして、殺し屋と奴隷のかわりに、真の富の生産者であり、最高の労働者であり、最高に高邁なタイプの人間、つまり独立独行のたたきあげの人間、つまりアメリカの実業家が生まれたのです。)

以上の引用文は、小説の登場人物でも主要な人物が語るもので、ほぼアイン・ランドの思想表明であると考えていい。これらを参考にしつつ、彼女の資本主義観を筆者なりにパラフレーズすると以下になる。

(1) AがA自身の知力体力の発揮＝労働により生産し獲得したものと、BがB自身の知力体力の発揮＝労働により生産獲得したものを、AとBそれぞれにとって自己利益になるので、合意の上で交換する。このような合意の上の等価交換取引関係を、いつでもどこでも自由に実施する自由があり、その自由が法的に守られるシステムが資本主義である。自身の知力体力の発揮＝労働により生産獲得したものに対して持つ権利＝所有権こそ、人間の尊厳を守る。個人の所有権を守るシステムは資本主義である。よって、資本主義こそが道徳的に正しい。

(2) このような合意の上の等価交換取引関係が人間間に成立するという事は、交換し合う価値があるものを生産できる能力を人間が持っていることを前提としている。同時に、価値あるものを合意のもとに交換することができる信頼関係を人間が形成できることを前提としている。すなわち、資本主義は、人間の理性と能力を前提とし証明するので、道徳的である。

(3) カネ、貨幣とは、人間が労働によって生産し

た価値あるものを、別の人間が労働によって生産した価値あるものと交換する行為の蓄積反復の歴史から生まれた交換媒体である。「カネは諸悪の根源」という見解は、逆説的に貨幣を物神化しているからこそ生まれる。貨幣の発生と機能の根源を考えれば、貨幣は素晴らしい。貨幣の誕生は、人間が価値あるものを生産できる能力があるという証である。人間が価値あるものを、同じくらいに価値あるものと公平に交換できるという人間の信頼性の証である。

(4) ただし、世界には、自分の知力体力の発揮＝労働によって価値あるものを生産できる人間と、生産できない人間がいる。生産できる人間は、生産できない人間によって寄生される。公平な等価交換取引関係が成立せずに、一方的に生産するものが、生産しないものから自分の生産物を略奪されることは歴史上おびただしく起きてきた。すなわち所有権の蹂躪は、圧倒的に多かった。それが政治体制として続いてきた。王政や貴族制がそうである。労働によってではなく、必要に応じて生産物が分配される社会主義や、全てが共有される共産主義も、所有権を蹂躪するシステムである。政府が個人間の自由な取引交換である商行為を規制する統制経済は、道徳に反する。市場は、個人間の合意に基づいた自由で公平な取引交換関係が展開される空間であり、政府が介入してはならない。だから、自由放任資本主義は正しい。

(5) アメリカ合衆国は、王政、貴族制から脱し、自分の知力体力＝労働によって価値あるものを生産する人々によって建国された史上初めての唯一の国家である。だからこそ、アメリカ合衆国の意義は大きい。

以上のように、ランドが言うところの資本主義とは、相互利益のある合意に基づいた自由で自主的な取引交換関係のことであり、それを法的に保障する体制のことであり、搾取や略奪が介在しない人間関係が問題とされる。ランドの資本主義観の前提となる世界観は、「世界は自分の力で生産する者と、他人の生産物に寄生して生きるものが相克する場所」ということである。ランドにとって、歴史は「他人の生産物に寄生して生きる者から、自分の力で生産する者を解放する過程」である。人類の進歩とは、個人が自分の労働によって獲得したものを奪われない度合いが増加

することである。

だからこそ、ランドの資本主義観においては、資本主義は道徳である。人間の美德の産物である。だからこそ「いまだ厳密には実現されていない理想」である。ランドにとっては、過去の資本主義も現在の資本主義も、みな似非資本主義である。2008年のリーマンショックを引き起したような強欲資本主義は、必ずしも21世紀だけの現象ではない。1930年代の大不況による困窮への解決策として期待された社会主義や共産主義の台頭は、資本主義がもたらす問題が原因なのではない。道徳としての資本主義が足りないから生じる問題なのだ。公平な交換交易関係が個人間に成立していないから生じる問題なのだ。

ランドは、『資本主義---いまだ知られざる理想』(*Capitalism: The Unknown Ideal*)というタイトルのエッセイ集を1967年に出版している。なぜ、私たちが所与のものとして自然化している資本主義が、「いまだ知られざる理想」なのか。ランドにとっては、公平な交換交易関係が成立していないからこそ、つまりランドが説くところの資本主義の原則が機能していないからこそ、資本主義が非難されるという倒錯的な事態がまかり通っている。だから、資本主義は「いまだ知られざる理想」なのだ。

かくも、ランドの資本主義観は倫理的である。無神論者であると自称していたアイン・ランド自身は意識していなかったかもしれないが、彼女の資本主義観は、ヴェーバーが論じたところの「信仰によって生まれた資本主義の精神」と本質的には同じである。彼女が自分が定義する資本主義は道徳であると言ったのは、無理もない。

4.1.2 『海賊とよばれた男』に底流する日本的資本主義

前述のヴェーバーは、資本主義の精神は、カルヴィニズムが浸透したジュネーヴとスコットランドとネーデルランドとニューイングランドと英国にのみ生まれたと述べたが、そこに異論をさしはさんだのが山本七平(1921-91)である。1979年に山本は、『日本主義の精神』と『勤勉の哲学』において、日本の江戸期において、ヴェーバーが指摘したような「資本主義の精神」が日本に生まれていたからこそ、明治

期の急速な近代化が可能であったことを指摘した。

前述の小室直樹によると、山本の研究と洞察はアカデミズムの中で十分に論議検証されていないようであるが、山本が江戸期初期の鈴木正三(しょうさん: 1597-1655)について着目したのは画期的なことであった。鈴木正三は江戸時代初期の曹洞宗の僧侶であり仮名草紙作家である。もともとは徳川家に仕えた武士であり、初陣は関が原の戦いであったが、42歳で出家して、在家の人々の教育のために、当時流行の仮名草紙(今で言うイラストつき読本)作家となり、仏教を説いた。

その鈴木正三は、労働で忙しく仏法を学ぶ時間もないし、修業する時間もないと嘆く庶民に対して、「世俗の業務は、宗教的修業であり、それを一心不乱に行えば成仏できる」と説いた。貪欲に追及したのではないのに、利潤が生じて、それは悪ではないと説明し、結果としての利潤を肯定した(山本, [1979], 2015, 166-69)。

日本人にとって、労働は必ずしも経済的行為ではなく倫理的行為であるという考え方は、現代の日本人からはかなり消えつつあるのかもしれないが、こうした考え方は今でも残っている。少なくとも『海賊とよばれた男』が舞台とする大正から昭和においては、日本人のエトスであったと言っている。だから、現代の私たちは、この発想がいかに革命的な発想であったのか、わからなくなっている(小室, 1992, 112)。

鈴木正三の「世俗の業務は、宗教的修業であり、それを一心不乱に行えば成仏できる」という考え方は仏教の思想ではない。仏教においては、労働しては解脱から遠ざかるばかりであり、「仏教において最も尊重される僧は、すべて喜捨によって生活しなければならぬ」(53-54)。しかし、鈴木正三は、勤勉の哲学も目的合理主義も行動的禁欲も絶対に生まれようがない仏教思想から、「何の事業も皆仏行なり」と説いた。これは、「コペルニクスの思想転換」だった(112)。小室は、これについて「創造である。思想上の創造である。この創造によって日本資本主義の精神は生まれた」と書き、鈴木正三を資本主義の文脈から再発見した山本を賞賛した(113)。

さらに、鈴木正三は、「売買の作業は、国中の自由をなさしむべき役人に、天道よりあたへたまふ所也」と述べた(山本, [1979], 2015, 163)。この役人というのは、官僚の意味ではない。役を担う人という意味である。売買の作業をする商人がいなければ自由がなくなるのだから、商人は天から与えられた大事な仕事を担っていると、鈴木正三は語ったのである。これは、16世紀の武士が言ったとは思えない商業賞賛論である(164)。このことについて、山本は「われわれは、自由という言葉をさまざまに使うが、少なくともその基本的な『不自由でない』という状態は、流通によって支えられているということに、案外気づかない。一切の流通がとまれば、人はあらゆる面で拘束を受ける。現代なら、石油の流通がとまり食糧の流通がとまったら、日本人の全員が動くに動けない状態となり、『自由』を論ずる自由さえ失ってしまうであろう」と書いて鈴木正三の卓見と洞察の独創性を指摘している(163-64)。

加えて、山本は、この鈴木正三の思想的後継者として江戸後期の思想家であり、石門心学の開祖である石田梅岩(1685-1744)を挙げた(山本, [1979], 2015, 120-36/[1979], 1984, 133-247/[1989], 2006, 701-717)。梅岩は農民の次男として生まれ、11歳で京都の呉服商に丁稚として雇われ、奉公先が倒産したので、さらに別の呉服商に奉公に出た商人であった。しかし、無類の読書家であった。商家の番頭(今で言えば商店の事務員兼販売員)として働き、45歳で引退し、自宅の一室で私塾を開き、無料で老若男女問わず、独学で学んだことから抽出した道徳を伝えていたら、評判を呼び、ついには門弟400人を集めるまでにいった。その教えは、後世の人々から「石門心学」と呼ばれた。

山本によると、江戸初期に鈴木正三によって生まれた「日本資本主義の精神」は、江戸後期の石田梅岩によってさらに広まり、日本人の勤勉の哲学となり、農民や職人や商人階級の勤労と節約とその結果の富の蓄積を推進した。梅岩の思想は徳川体制を補強した一種の「御用学者」の思想に見えるかもしれないが、実は豪農や豪商の資本を蓄積させ、幕藩体制を崩壊させた一因となったことを、山本は示唆している(山

本, [1989], 2006, 716-17)。

同時に、山本は、「日本資本主義の精神」における大きな問題も指摘した。それは、仕事や労働が純経済的行為ではなく、仕事が宗教的救済をめざした修業であり、精神的充足を求める行為だからこそ生まれる弊害だ。そうなると、企業のような集団は、機能集団(ゲゼルシャフト)ではなく、運命共同体(ゲマインシャフト)になりやすい。「日本の会社は、機能集団と共同体の二重構造」(山本, [1979], 2015, 44)になってしまいやすく、営利組織として目的合理的に動かなければならない場合に、共同体として非合理性を内包してしまう。

『海賊とよばれた男』に描かれた国岡商店のあり方には、山本七平が指摘したところの、「日本資本主義の精神」と「機能集団と共同体の二重構造」ぶりが溢れている。主人公にとって、自分が立ち上げた会社は、自分の家族という共同体であり、その共同体の成員である社員を解雇しないし、老齢を理由に定年退職させない。家族を信じているからという理由で出勤簿はない。国岡商店は家族なので、上場しない。上場すれば、株主という他人に左右される。国岡商店の株は家族で分け合う。国岡商店には労働組合はない。国岡商店には資本家と労働者の対立はない。店主も重役も一介の社員も、家族を支える一員であり、社員は店主の奴隷ではない。戦時中に社員が徴兵されて会社で働けなくても、その期間の給与は支払い続ける。国岡商店の店員のすさまじいまでの決断力と勤勉さによって生まれるところの企業という機能集団としての業績は、国岡商店が共同体であるからこそ生まれた。『海賊とよばれた男』は、まさに江戸期からの伝統的「日本資本主義の精神」の想像上の具現化である。

4.2 リバタリアニズム

前述したように、両作品は資本主義の精神を祝福している点においてよく似ている。同時に、両作品は、底流にリバタリアニズム(Libertarianism)がある。主人公たちが戦う相手は、統制経済であり、私企業の自由闊達な活動に対する政府の干渉であり、状況の変化に対応できない硬直した官僚たちである。官

僚は、国民のための政策ではなく、自分たちが属する官僚共同体の権益拡大のための政策を採りがちなので、官僚の跋扈は排除しなければならない。この姿勢は、政治思想的にはリバータリアニズムとよばれる。

リバータリアニズムは、日本においても、副島隆彦や森村進や蔵研也や菅野淳などの著作が示すように、政治学や法哲学の分野では、すでによく知られているが、一般的には、まだなじみがない政治思想である。『オックスフォード英語辞典』(Oxford Dictionary of English: 2005)の定義によると、「市民生活に国家が最低限の介入しかしないことを提唱する極端な自由放任政治哲学。個人の道徳は国家が関わることではないと考える。だから、他人を傷つけない麻薬使用や売春のような活動を合法的にするべきではないと考える。特にアメリカ合衆国ではそうなのだが、一般的には右翼と関係があり、伝統的リベラリズムが持つ社会的正義の問題への関心は欠如している」(“an extreme laissez-faire political philosophy advocating only minimal state intervention in the lives of citizens: Its adherents believe that private morality is not the state’s affair, and that therefore activities such as drug use and prostitution that arguably harm no one but the participants should not be illegal. Libertarianism shares elements with anarchism, although it is generally associated more with the political right (chiefly in the US); it lacks the concern of traditional liberalism with social justice.”)とある。

この定義は、リバータリアニズムに対して悪意的であり無知である。こういう現象は珍しくない。アメリカにおいても日本においても、新自由主義(Neo Liberalism)と混同される強欲資本主義とリバータリアニズムを混同させてリバータリアニズムを、2008年の世界的金融危機(リーマン・ショック)の元凶であるとして糾弾する言論が存在する。しかし、これらはリバータリアニズムに対する無知と認識不足から生じている(仲正, 139-140)。

リバータリアニズムが前提とするのは、あくまでも、かけがえのない誰の人生とも代替のきかない独

自の個別の人生を持つ存在として人間を見ることである(Barry, 1987, 4)。アイン・ランドは、本人の意図とは別に、アメリカにおけるリバータリアニズムの提唱者のひとりとして目されてきたが、「ひとつのまとまった集団の頭脳とか、ひとつのまとまった人種の頭脳というものなど存在しない。同じく、ひとつのまとまった集団の業績とか、ひとつのまとまった人種の業績なども存在しない。あるのは、個人の頭脳と個人の業績だけだ。文化というものは、区別のつかない集団の誰かが作ったかわからないような生産物ではない。個々の個人の知的業績の総計が、文化である」(Rand, [1961], 1964, 148/藤森訳236)と述べている。つまり、リバータリアニズムは、国家や性別や人種や民族性などによって分類される集団に個人を還元することをあくまでも拒否する。人間は、どの集団に帰属しようが、いくつの集団に帰属しようが、個別の個人としての人生を生きるしかない存在である。リアルにあるのは、個別の人間の個別の人生だけだ。だからこそ、リバータリアニズムは、個人の生存をおびやかす幸福の追求を妨害する政治経済体制を廃し、小さな政府を支持する。共通善の名のもとに個人の諸権利を抑圧する集団主義や全体主義や専制政治や独裁制を憎む。

前述のO E Dの定義が述べるように、確かに、この思想の信奉者はアメリカ合衆国に多いが、その影響はより広範囲に及んでいる。英国やカナダやオーストラリアやニュージーランドやアイスランドなどの英語圏はもちろんのこと、フランスやドイツやノルウェー、イタリア、ロシア、ギリシアにも、リバータリアニズム系の政党やシンク・タンクがある。リバータリアニズムは一枚岩ではなく、様々な立場があるのだが、どの種類の、またどの国のリバータリアニズムも、共通する要素は、法の支配のもとにおける個人の自由の最大化と、国家の介入の最小化と、自由市場資本主義の支持である。デイヴィッド・ボウツ(David Boaz)によれば、リバータリアニズムの基本概念は、個人主義と、個人の権利と、自発的(自発的)秩序と、法の支配と、制限された政府と、自由市場と、生産する美德と、利益の自然調和と、平和となる(Boaz, 16-19/副島訳, 40-46)。リバータ

リアニズムとは、アメリカ独立革命やフランス革命などの市民革命の土台であった啓蒙思想、古典的自由主義 (Classical Liberalism) の原点にもどり、その精神をより徹底して実践することをめざすものである。

『海賊とよばれる男』の主人公のモデルとなった出光佐三や、この小説の作家百田尚樹の政治思想的背景は明らかではないが、主人公の国岡鐵造が支持する経済政策はリバタリアン的である。心より国を愛するからこそ、社会の発展に貢献する責任ある企業家でありたい彼は言う。「自由主義経済の下では、すべてのものが政府の規制によらず、自由に販売されなくてはなりません。しかしながらあらゆる物資が欠乏している現在の日本では、統制および配給もやむを得ないものがあります。しかし、これはあくまでも一時的な緊急措置であらねばなりません。石油もまたしかりです。石油の輸入がいずれ自由化されたときには、政府による統制や配給は必ず問題を起こします。価格も自由に決められず、市場に満足のいく量が行き渡らない状態が常に起こるでしょう。経済は生き物です。管理しようとしても、計算どおりには動きません。市場が混乱すると、いちばん損をするのは消費者であり、もっとも得をするのは利権を持った者たちになります。このことは、共産主義国家の経済を見ればあきらかでしょう」(百田, 上巻, 147-48) と。国岡鐵造が愛する国とは、あくまでも国 (nation) であって、政府 (government) ではない。

『海賊とよばれる男』には、城山三郎の『官僚たちの夏』に登場するところの実在した通産官僚の左橋滋をモデルにした風越信吾のような憂国の官僚は登場しない。民間企業を護送船団方式で指導して、国家の産業政策をリードし成功に導くような有能な通産省官僚は登場しない。『海賊とよばれる男』に登場する官僚の多くは、軍人を含めて、有能で志の高い企業家を排除して、凡庸な企業家たちを指導統制したが、大きな視野で国家や社会や国民の福祉を考えずに、自分たちの権限拡大だけを画策する。『肩をすくめるアトラス』も同じである。ダグニーをはじめとする主要登場人物は政府の介入と統制に苦しむ企業家

である。彼女や彼らの敵は、官僚と、官僚と結託して競争相手を排除する法律を施行させたがる保身ばかりの悪質な企業家である。

5 結論にかえて---共同体と機能集団の未分化を超えて個人の尊厳へ

以上のように、『肩をすくめるアトラス』と『海賊とよばれる男』の類似点を指摘することによって、日本人読者にとっては理解しにくいように見える『肩をすくめるアトラス』に描かれている資本主義の精神やリバタリアニズムが、日本人読者にもなじみやすいものであることを示した。最後に結論にかえて、同じ問題系を扱っているアメリカと日本の「資本主義の精神祝福物語」の間にある大きな差異について言及したい。この差異こそが、日本人読者がアイン・ランドの資本主義観から学べることもかもしれない。それは、共同体と個人の関係に関することである。

先に、山本七平が指摘したところの、日本においては共同体と機能集団が未分化になりやすいことについて言及した。『海賊とよばれる男』における国岡商店は、企業という営利集団であるのに大きな家族であり、店主を父とする共同体であった。これについて、日本人読者は異常を感じない。日本の企業が営利組織という機能集団であり、かつ共同体であるという二重構造は日本人にとっては不思議ではない。言いかえれば、これは、国岡商店という営利企業に属することは、店員 (社員) は利益を上げることと同時に、国岡商店という家族、共同体の一員であることも求められるということだ。だからこそ、小説の中でも国岡商店の店員たちは、労働基準法だの残業時間など気にすることなく猛烈に働く。国岡商店は、労働と時間を切り売る場所ではなく、人生全部を関与させる場所となる。これは、店員にとって、国岡商店が国岡鐵造のような稀有なほどの優れた企業家であるカリスマによって率いられているからこそ、可能なことである。凡庸以下の経営者による企業であるのならば、店員にとっては国岡商店は最悪のブラック企業となる。過労死するまで自分の時間とエネルギーを捧げるブラック企業となる。

山本七平は、旧国鉄を例に挙げている。旧国鉄は運送業であり、その機能は輸送であるのに、「国鉄一家」という共同体を維持するために、輸送が手段と化していた（山本、[1979]、2015、78）。旧国鉄の民営化の理由のひとつは、「国鉄一家」の維持のために運送業サービスの質を低下させていた状況の是正であった。こういうことは日本においては例を探すのが簡単だ。国民の生命と財産を守らない軍隊。教育活動しない教員組合。教職員の生活のためにある大学。役人の天下り先としてのみ機能しているような類の特殊法人。

しかし、日本における企業や団体の機能集団と共同体の二重構造が問題なのは、目的と手段の混同だけではない。その二重構造は、組織の成員の個人の尊厳を奪うことになりやすいということだ。機能集団の成員は、その集団の機能を果たすことに貢献すれば、その職務は果たしたことになるのに、それ以上の組織への関与を求められがちだ。例としては、勤務時間後の同僚や上司との半強制的な交際から、組織の犯罪の隠蔽まで幅広いだろう。

つまり、日本人の資本主義の精神には、個人の尊厳の要素が足りない。一方、『肩をすくめるアトラス』に描かれる新世界、ゴールト峡谷のメンバーは、以下のことを誓う。「私の人生と愛によって、私は誓う。私は決して他人のために生きることはなく、他人に私のために生きることを求めない」（“I SWEAR BY MY LIFE AND MY LOVE OF IT THAT I WILL NEVER LIVE FOR THE SAKE OF ANOTHER MAN, NOR ASK ANOTHER MAN TO LIVE FOR MINE.”）（Rand, [1957], 1992, 675）と。

アイン・ランドの思想「客観主義」において、もっとも理解しにくいのは、「利他主義」の否定であろうが、彼女は、利他主義を、親切さや善意や他人の諸権利への尊敬と同義にはしていない。「利他主義の基本原則とは、人間は自分自身のために生きる権利がないということであり、他人への奉仕のみが人間存在の唯一の正当化であり、自己犠牲が人間の最高の道徳的義務であり美德であり価値であるとする事」（Binswanger ed., 4）である。利他主義は、前提として個人としての人間の否定がある。個人とし

ての人間の理性に基づいた自由意志による選択より、集団の意向を優先させる。アイン・ランドが利他主義を否定して、利己主義を薦めるのは、個人の尊厳を重視するからである。

日本の資本主義の精神には、個人の尊厳＝個人主義が足りない。「個人主義」と言う言葉は、日本では「自分勝手」というニュアンスがあり、否定的意味合いで使われやすいが、そのこと自体が、日本における共同体と機能集団の二重構造と、それによる共同体への個人の埋没が当然視され、結果として個人の尊厳が軽視される日本の伝統的状況の派生物である。日本人が、アイン・ランドの思想、及び彼女の資本主義観から学ぶべきことは、この個人の尊厳である。真の意味での個人主義である。

参考文献

- Barry, Norman P. 1987. *On Classical Liberalism and Libertarianism*. New York : St. Martin's Press. ノーマン・バリー著. 2004. 『自由の正当性---古典的自由主義とリバタリアニズム』足立幸男訳. 木鐸社.
- Bingswanger, Harry Ed. 1986. *The Ayn Rand Lexicon : Objectivism from A to Z*. New York : New American Library.
- Boaz, David. 1997. *Libertarianism : A Primer*. New York : The Free Press. ダヴィッド・ボアズ著. 1998. 『リバータリアニズム入門』副島隆彦訳. 洋泉社.
- Iga, Mamoru. 1986. *The Thorn in the Chrysanthemum : Suicide and Economic Success in Modern Japan*. Berkeley : University of California Press.
- Macpherson, C.B. [1962] 2011. *The Political Possessive Individualism : Hobbes to Locke*. Oxford : Oxford University Press. C・B・マクファーソン著. 1980. 『所有的个人主義の政治理論』藤野涉, 将積茂, 瀬沼長一郎訳 合同出版.
- Ozaki, Robert. 1991. *Human Capitalism : The Japanese*

- Enterprise System as World Model*. Tokyo : Kodansha International.
- Rand, Ayn. [1957], 1992. *Atlas Shrugged*. New York : Random House. New York : New American Library. アイン・ランド. 2004. 『肩をすくめるアトラス』脇坂あゆみ訳. ビジネス社.
- Rand, Ayn. [1961], 1964. *The Virtue of Selfishness : A New Concept of Egoism*. New York : New American Library. アイン・ランド. 2008. 『利己主義という気概』藤森かよこ訳. ビジネス社.
- Rand, Ayn. 1967. *Capitalism : The Unknown Ideal*. New York : New American Library.
- Yamamoto, Shichihei. Lynne.E. Riggs. 2000. *The Spirit of Japanese Capitalism and Selected Essays*. Madison Books.
- 大塚久雄. 1977. 『社会科学における人間』岩波書店.
- 菅野淳. 2013. 『米国のリバタリアニズムと「新保守主義」』志學社.
- 蔵研也. 2007. 『リバタリアン宣言』, 朝日選書.
- 蔵研也. 2007. 『国家は, いらぬ』, 洋泉社.
- 小室直樹. 1992. 『日本資本主義崩壊の論理』光文社.
- 城山三郎. [1975], 1980. 『官僚たちの夏』新潮社.
- 副島隆彦. 1999. 『世界覇権国アメリカを動かす政治家と知識人たち』講談社.
- 仲正昌樹. 2008. 『集中講義! アメリカ現代思想---リベラリズムの冒険』NHKブックス.
- 百田尚樹. [2012] 2016. 『海賊と呼ばれた男』上, 講談社
- 百田尚樹. [2012] 2014. 『海賊と呼ばれた男』下, 講談社
- 藤森かよこ. 2008. 「アイン・ランドの資本主義観 : 反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福した*Atlas Shrugged*」『桃山学院大学・人間科学論集』第35号, 219-249.
- 藤森かよこ. 2013. 「アイン・ランドの思想と『肩をすくめるアトラス』」『都市経営』(福山市立大学) 2号, 113-28.
- 藤森かよこ. 2014. 「アイン・ランド『肩をすくめるアトラス』と百田尚樹『海賊と呼ばれた男』---日本人にとってのアイン・ランドの意義」講演DVD, 東京アイン・ランド読者会.
- 藤森かよこ. 2016. 「アイン・ランドと新自由主義」『都市経営』(福山市立大学) 9号, 17-33.
- 水木 楊. 2013. 『出光佐三 反骨の言魂』PHP ビジネス新書
- 森村進. 2001. 『自由はどこまで可能か---リバタリアニズム入門』講談社現代新書.
- 森村進 編著. 2005. 『リバタリアニズム読本』勁草書房.
- 森村進 編著. 2009. 『リバタリアニズムの多面体』勁草書房.
- 山本七平. [1979], 2015. 『日本資本主義の精神』ビジネス社.
- 山本七平. [1979], 1984. 『勤勉の哲学 日本人を動かす原理』PHP文庫
- 山本七平. [1989], 2006. 『日本人とは何か』祥伝社.
- ヴェーバー・マックス. [1989], 2000. 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳. 岩波書店.

Ayn Rand and Capitalism

Kayoko FUJIMORI

Ayn Rand's defense of capitalism has infuriated anti-capitalists, including many American intellectuals. In popular usage in the context of literary criticism, the word "capitalism" is a synonym of evil. In such an anti-capitalist American intellectual milieu, Ayn Rand dared to refuse to renounce the concept of capitalism.

Ayn Rand's view of capitalism is derived from the following ideas: reality exists as an objective absolute, independent of man's feelings, wishes, hopes, or fears; reason is man's only means of perceiving reality, man's only source of knowledge, man's only guide of action, and man's means of survival; every man is an end in himself/herself, not the means to the ends of others; man must exist for his/her own sake, neither sacrificing him/her to others nor sacrificing others to him/her; the pursuit of man's own rational self-interests based on a long-term vision and the achievement of his/her own happiness are the moral purposes of his/her life; therefore, the ideal political-economic system is laissez-faire capitalism, because it is a system where men deal with one another, not as victims and executioners, nor as masters and slaves, but as traders, by free, voluntary exchange to mutual benefit; the government acts only as a protector of man's rights; for the above-mentioned reasons, of all the social systems in human history, capitalism is the only system based on morality, though a pure system of capitalism has never yet existed even in America; that is to say, capitalism is the system of the future or the unknown ideal.

Thus we can safely say that Ayn Rand's view of capitalism seems to be "humanistic" rather than "capitalistic." Ayn Rand's defense of capitalism as a moral system makes readers recognize that protection of individual rights and creation of prosperity as its result depend on the spiritualization of political-economic life through the recognition and practice of morality, or on the true spirits of capitalism which was previously discussed by Max Weber.

Keywords : spirits of capitalism, capitalism as morality, individualism, libertarianism, laissez-faire capitalism

DOI : 10.15096 / UrbanManagement.1004